
思いついたネタの集まり

AST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

思いついたネタの集まり

【Nコード】

N1235Y

【作者名】

A S T

【あらすじ】

これは思いついたネタを書いたら、投稿して置いておく所です。活動報告に書いておくのが面倒になったので、ここに纏めておきます。

基本的に思いつきなので内容が雑な文章になると思います。

レギオス 再生者レイフォン（前書き）

今回はレイフォン強化の話です。

書き方や話が雑なので、見たくない人は見ないで置いてください
あくまで連載や短編にするまでも無い程度の思いつきのネタですか
ら

レギオス 再生者レイフォン

移動都市にして最強の都市、槍殻都市グレンダン

そこにあるデルク・サイハーデンが経営する孤児院に一人の神父がいた。

「良いですか？暴力を振るって良い相手は、汚染獣と異教徒共だけです。わかりましたね？」

「「「「「はい」「」「」」」」」

神父の名前はアレクサンド・アンデルセン

今は亡き宗教都市『バチカン』の神父であり、武芸者である。

現在は孤児院の神父をしている。

「レイフォン・・・」

「自分のした事は分かっています。」

彼は孤児院を出て行く優しい弟子に話しかけた。

「お前のした事は確かに赦されない事だ。だが、そのお陰で孤児院の子供たちが飢餓に苦しまずに済んだ。礼を言おう」

「いえ、神父にそう言って頂けるだけで僕は満足です。」

すると、アンデルセンはある物をレイフォンに渡す。

「これはお前の服だ。それとこの錬金鋼と聖書もな。」

「いいんですか?」

「ああ、お前は私の弟子だからな」

「ありがとうございます。神父」

レイフォンは直に神父服を纏う。

「お前は私とは違う。お前は自分の道を征け」

「はい！行って来ます。」

レイフォンはそう言って、孤児院を出て行くのだった。

「レイフォン・・・」

「リーリン、貴方も見送りぐらいはしてやりなさい」

「はい・・・」

そう言って、彼の幼馴染も行く

そしてアンデルセンは空を見上げる。

「神よ、どうか彼らを見守りください。Amen」

時は過ぎ・・・レイフォンの編入先である学園都市『ツエルニ』に汚染獣が襲撃してきた。

第十七小隊隊長ニーナ・アントークは初の汚染獣と交戦で、幼生体に苦戦し倒れてしまった。

彼女に襲い掛かる幼生体の牙。

しかし、その牙が彼女に届くことは無かった。

何故なら、何処からか飛んで来た大量の銃剣が幼生体の体を滅多刺しにしたからだ。

「なっ!?!」

周囲を見渡すと、他の幼生体も同じように大量の銃剣が突き刺さっている。

その時、足音と荒い息遣いがニーナの耳に聞こえてきた。

フー・・・フー・・・と言う獣のような荒い息使い

建物の影から出てきたのは、戦闘神父服をきたレイフォンだった。

「レイ・・・フォン・・・？」

レイフォンは残っていた幼生体を見据えると、両手に持った銃剣を十字に構える。

「我等は神の代理人。
神罰の地上代行者。」

我等が使命は我が神に逆らう愚者を
その肉の一片までも絶滅する事・・・
Am^{エイメン}en!!」

レイフォンの眼がキラリと輝き、一瞬のうちに銃剣を投擲する。

大量の銃剣によって貫かれた哀れな幼生体は一瞬の内に絶命した。

「さて・・・大丈夫ですか？隊長」

「あ、ああ・・・」

レイフォンはニーナの傷を確認すると、懐から聖書を取り出し回復魔法をかけた。

「なっ!？」

みるみる内に彼女の肩口の傷が塞がってゆく

「ちよつとした自己治癒の促進です。」

そう言って説明するレイフォン

粗方、彼女の治療が終わるとやって来た救護班に彼女を任せた。

「さて……来てくれると信じていましたよ……」

銀髪の美少女、フェリ・ロスに優しく語り掛ける。

「……今回だけですよ」

「充分です。」

カリアンを筆頭とした生徒会のメンバーに作戦を伝え、武芸科の生徒たちを防護柵の後方に下がらせる。

「作戦開始」

フェリの放った探索子から幼生体の数が伝えられる。

982体

「グレンダンにいた頃は万単位の幼生体に囲まれた事がある。」

そう言っつて、不安げになるフェリを落ち着ける。

「レストレーション02」

両手に持った銃剣を極細の鋼糸に変えて、幼生体を切り刻んでゆく。

「エ`エ`エ`イメエエエエエエエエエエッ！……！」

振り下ろされた銃剣は寸分変わらず汚染獣の首を切り落としたのだっ
た・・・

ここに神罰の執行は完了した。

マニゴルド 異世界記(前書き)

今回はマニゴルドがネギまの世界に行きます。

マニゴルド 異世界記

「アンタもこれで塵芥だな！」

「貴様・・ツ!!」

黄金聖闘士、蟹座のマニゴルドは死の神タナトスの寄り代である体と共に超次元へと飛び込み、己の命と引き換えにタナトス打倒の血路を開いた。

“後は任せませ・・お師匠”

師であるセージに後を任せ、マニゴルドは散っていった。

彼の残った『小宇宙』はテンマとシオンに別れの言葉を告げて消えた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ？」

死んだはずの彼が目覚めると眼に入ったのは、見たこともない天井だった。

「・・・・・・・・ここは何処だ？」

すると部屋のドアが開き中年の男性が入ってきた。

「やあ、気が付いたようだね。」

「アンタは？」

彼は柔らかな笑みを浮かべて答えた。

「僕の名前はタカミチ・T・高畑と言う」

「そうかい、俺の名はマニゴルドだ。で、ここは何処なんだよ？」

ふてぶてしい言い方ではあるが、これが彼なのだから仕方がない

「ここは日本にある麻帆良学園と言う所だ。」

「はあっ!?! サムライとかショーゲンがいる国イッ!?!?」

なんか間違った日本の知識を披露するマニゴルドにタカミチは説明する。

「ははは・・・確かに侍や将軍はいたけど何百年も前の話だよ?」

タカミチが何気なく言った言葉にマニゴルドは違和感を覚えた。

「ちょっと待て・・・今、何百年も前って言ったよな?」

「ああ・・・それがどうかしたかい?」

「今は何年だ?」

「今は2002年の四月だけど？」

「なッ!？」

マニゴルドはその言葉に驚愕した。

自分達がいた時代は良く分からないが、確か同じ黄金聖闘士である水瓶座アクエリウスのデジエルが言うには18世紀、1700年代だった。

“俺は300年後の未来に來ちまったって言うのかよ……”

タカミチの方も、何か察したらしく

「どうやら事情があるみたいだね。詳しいことは学園長室で話そうか」

タカミチはそう言って、マニゴルドを案内するのだった。

学園長室に入って、マニゴルドが見たのは幼女と……ぬらりひよんだった。

「なあ、タカミチ。コイツは人間か？」

「初対面でいきなり酷いのう……」

「あはは……一応は人間だよ。」

とりあえずマニゴルドは自己紹介をする。

「俺の名はマニゴルドだ。」

「わしは近衛近右衛門。この麻帆良学園の学園長をしておる。」

「エヴァンジェリン・A・K・マクダウエルだ。」

フオフオフオと笑う学園長はマニゴルドに聞く

「お主はどうして学園の敷地に倒れていた？そしてお主は何者かの？」

「いいぜ、教えてやるよ。」

彼から語られるのは、神話より続く聖戦の歴史。

黄金聖闘士であり、死を司る神タナトスと戦って死んだ事

そして十八世紀の人間であることだった・・・

「信じられんのう・・・」

「まあ、そうだろうな。俺だって信じられねえよ。」

「なら、『小宇宙』とやらを見せてみる」

「いいぜ、見せてやるよ。」

エヴァに言われて、マニゴルドは己の『小宇宙』を燃やす。

次の瞬間、三人が感じたのは魔力とは比べ物にならない程、強大

な宇宙だった。

「これが『小宇宙』・・・」

「魔力や気とは比べ物にならないなんて・・・」

「・・・フッフ、面白いな」

今度は学園長がこの世界についてと魔法についてを話した。

「へえ・・・魔法ねえ・・・御伽話だと思ってたんだがな。」

「お前の方がよっぽど御伽話だ。」

エヴァに突っ込まれるマニゴルド

「お前が吸血鬼で600歳のババアなんてなあ・・・」

「誰がババアだ!!」

マニゴルドに学園長は問う

「さて、これからお主はどうするつもりかの?」

「さあな・・・行く当てもねえよ。」

「ならば、ここで警備員として働いてみるのはどうかの?」

「警備員?」

「そうじゃ、ここは世界樹があるが故に狙われやすい。もちろん衣食住は保障する。」

「よし、乗った!」

その話を聞いてマニゴルドは即答した。

そして、始まる麻帆良での生活

「鬼か・・・さつさと地獄に帰りな!!」

鬼に向かって放たれるは黄泉路へ送る光

「積戸気冥界波!!」

「」「」「わあああああつ!!!!?」「」「」

鬼共は地獄へと送り返される。

「副担任をして貰いたいのじゃが・・・もちろん給料は出す。」

そう言われて、マニゴルドはA組の副担任になる。

「今日から、このクラスの副担任になったマニゴルドだ。よろしくな。」

「カッコいい〜〜〜!!!」「」

騒ぎ出す乙女達

「お前らは幸せなんだぜ？まともに勉強できて、不自由なく暮らせるんだからな」

「先生・貴方はどういう人生を送ってきたのです？」

学習する必要性を感じない生徒に、贅沢だと言つマニゴルド

「私のことが見えるんですか!？」

「ああ・お前は どうしたい？あの世に送られるか・このまま
でいるか・・・」

自縛霊となった彼女にマニゴルドは問う

そして修学旅行

「先生えええつ!!!」「」

「お前らには、まだ早えよ。マセガキ共」

口付けを迫る少女たちを相手にしないマニゴルド

「はあ〜〜いい男ですわ。あんさん」

「そうかい!そりゃ光栄だなッ!..!」

戦闘狂のゴスロリ少女に気に入られるマニゴールド

「悪いけど、君は危険だ。ここで消えてもらおうよ。」

「はっ、かかって来な。チビガキ!!」

造られた少年と戦う

「久しぶりねえ、蟹座の黄金聖闘士さん」

「うげっ！またお前かよ。オカマ野郎」

異なる世界でも交戦する蟹座とナス

「でかけりゃ良いって訳じゃねえんだよ!!」

「マニゴールドさん!？」

「そこで見ていな、ネギ坊主。積戸気鬼蒼炎!!」

鬼火がスクナの魂ごと焼き滅ぼす。

「僕を鍛えてください!!」

「はあ？エヴァにでも言えよ・・・」

強くなるうとする少年はマニゴールドに頼み込む

「だからどうした？それが戦争つてもんだらうが!!」

「そんな・・・」

少年に現実を教えるマニゴルド

「久しぶりだな。蟹座の黄金聖闘士。」

「テメエ・・・」

「世界樹の魔力は貰ってゆくぞ」

「今度はちゃんとぶっ飛ばしてやるよ！クソ神！！」

死の神に再び挑むマニゴルド

「マニゴルドさんを殺させません！！」

「下らん！貴様も死ぬが良い！！テリブル・プロビデンス！！」

「マニゴルドさあああん！！」

少年を庇い直撃を受けるマニゴルド

「へっ、見せてやるよ。人間の強さって奴をなあ！！」

「人間風情が神に歯向かうなど赦さん！！」

そして魔法の世界で神相手に死闘を繰り広げる。

果たしてマニゴルドは今度こそ神を打倒できるのか？

蟹座の異世界記、始まる・・・か？

とある神浄の仕事（前書き）

今回はクロスオーバーではありません。

上条スーパーハーレム状態です。

夢のドリーム軍団です。

では、ごんぞ

とある神浄の仕事

清潔感漂う白を基調とした執務室。

部屋にドンと置いてある立派な机に黒髪ツンツンヘアの少年、上条当麻はぐったりと頭を乗せていた。

「うあゝ・・・不幸だ・・・」

すると、部屋に長い黒髪をポニーテールにした美女、神裂火織が入って来た。

「当麻、今回の書類です。」

ドンと机に置かれる書類の山を当麻はげんなりした表情で見ると

「なあ、火織。」

「何ですか？」

当麻は最近ずっと思っていた事を聞いた。

「何で、『神浄』になったら、書類仕事してんだろう・・・？」

「仕方無いでしょう・・・世界や魂の管理が神の仕事なんですから」

「ただ座って地上を眺めているだけかと思ってた・・・」

「一般的に天使がやっているイメージですからね・・・」

彼等が居るのは天界、つまり神の世界である。

上条当麻は様々な戦いを経て『神浄』として覚醒する事で、世界を守り続けようとした。

で、今に至る訳だが・・・

「あの元神の爺さん。俺が天界に来た途端に笑顔で仕事押し付けやがった・・・」

「あの方も疲れていたのでしょうね。」

「出張したり書類仕事する管理人の仕事だもんな・・・」

やれやれ、と当麻は溜息を吐く

「お前達も天使になって手伝ってくれるだけ有り難いよ」

「上条勢力だけで無く、全員協力してくれるとは思いませんでしたが・・・」

そう言う神裂は卑俗なる物を退け、熾天使や智天使の『愛』と『知恵』の振動で振り注ぐモノを受け止める上級天使第三位：座天使の階級に居る。

そして地上の奇跡を司る中級天使第五位：力天使の階級も兼任して居るのだ。

彼女は生前に聖人で女教皇であったため、難局に対して勇気を示し、力を振るって鼓舞する役割はピッタリだった。

今度は美琴が部屋に入って来た。

「当麻、この書類にサインしててね。後、浜面が麦野と絹旗にブツ飛ばされてたわよ。」

「美琴、アイテムや元暗部の連中は基本的に能天使だよな？」

「ええ、そうよ。」

「浜面も階級は能天使だったよな？」

「ええ・・・」

「死ぬんじゃない？」

「大丈夫よ。能天使なんだから・・・多分」

“最悪骨は拾ってやる。死ぬなよ、浜面・・・”

当麻は消滅の危機に陥っている友にエールを送る。

美琴の所属は力天使であり、彼女も神の力を示し鼓舞をする役割を担っている。

ここで上条勢力の所属図を説明しよう

・神

所属：上条当麻（神名：神淨の討魔）、アレイスター・クロウリー

・上級天使第一位：熾天使^{セラフィム}

所属：一方通行、上条当麻（兼任）、フィアンマ

・上級天使第二位：智天使^{ケルビム}

所属：ローラ・スチュアート、インデックス、雲川芹亜、リエメア

上級天使第三位：座天使^{スローンズ}

所属：キヤーリサ、ウィリアム・オルウェル、騎士団長、神裂火織、マタイ・リース

中級天使第四位：主天使^{ドミニオンズ}

所属：オルソラ・アキナス、五和、ヴェント、リドヴィア・ロレンツェティ、マタイ・リース（兼任）

中級天使第五位：力天使^{ヴァーチユーズ}

所属：キヤーリサ（兼任）ウィリアム・オルウェル（兼任）、神裂火織（兼任）、御坂美琴、風斬氷華、オリアナ・トムソン、レイヴニア・バードウェイ・・・

中級天使第六位：能天使^{パワーズ}

所属：騎士団長（兼任）、浜面仕上、アニーゼ・サンクティス、シェリー・クロムウェル、一方通行（兼任）、サーシャ・クロイツェフ、ヴェント（兼任）、土御門元春、結標淡希・・・

下級天使第七位：權天使^{ブリンシバリティーズ}

所属：オルソラ・アキナス（兼任）、ルチア、ヴィリアン、吹寄制理、黄泉川愛穂、月詠小萌、アンジェレネ、リドヴィア・ロレンツェティ（兼任）、マタイ・リース（兼任）

下級天使第八位：大天使
アークエンジェルス

所属：一方通行（兼任）、上条当麻（兼任）、フィアンマ（兼任）
・・・

下級天使第九位：天使
エンジェルス

所属：天草式、アニーゼ部隊、妹達・・・
シスターズ

「すつげえ、面子だな・・・」

「それも貴方の人徳と云うものですよ。」

「そうそう・・・」

神裂の言葉に美琴も同意する。

「で、今度の出張は・・・と・・・ネギま？」

「そうらしいわ。詳しい事は書いてあるし、頑張りなさい」

「って、お前は？」

「アタシは黒子達と一緒にガンパレードの世界よ。」

「結構ハードだな・・・」

幻獣にやられやしないかと不安げになる当麻

そんな当麻を励ますように言う

「大丈夫よ！この美琴様が幻獣なんかには負けるとでも思ってたんの？」

「いや、あり得ないか・・・ビリビリだし」

「ビリビリって言うな！！・・・って、懐かしいわね・・・百年振りかしら？」

「ああ・・・それ位だな。」

その事に過ぎ去った年月の長さを感じる当麻

「今回も幻想殺しで力封じた状態か・・・火織、一緒に来てくれるか？」

「ええ、構いませんよ。当麻・・・」

頬を染めながら言う神裂に美琴は顔を顰める。

「むう・・・まあ、仕方ないわね・・・火織さん、当麻をお願いね？特に女性関係で・・・」

「分かっていますよ。美琴」

お互いにフラグ野郎の当麻にため息を吐きながら言うのだった・・・

「ちなみに一方通行はシロガネタケルが来ない並行世界に行くらしいわよ」

「BETAとケイ素生命体、終わったな・・・」

「他にも聖杯戦争にウィリアム・オルウェルが行くらしいですよ。セイバーの代わりに・・・」

「おい待て、何でだよ。」

「セイバーが呼ばれずに衛宮士郎が殺される世界だからです。」

「成程・・・アイツなら大丈夫か」

当麻は次に出張する世界に向けて準備する。

「何かあったら、天草式も動かせるようにしておきます。」

「ああ、助かる。それと五和もサポートに連れて行くけど良いよな？」

「ええ、構いません。」

これは上条当麻が『神浄』へなつてからの物語

「アレイスターは？」

「エイワスと一緒に魔法少女と一緒に魔女を倒しています。」

「ローラは？」

「一方通行の裏方サポートとして、香月夕呼と一緒に悪たくみを・・・」

「キヤアリサ」

「並行世界に渡ろうとしているBETAの大軍を相手に騎士達を率いて戦っています。」

「皆頑張ってるなあ・・・」

当麻はそう呟くと、彼女と共に部屋を出て行くのだった・・・

とある神浄の仕事（後書き）

みんな、色んな世界で助っ人の仕事してます。

とある上条のIS（前書き）

上条さんとISのクロスです。

とある上条のIS

上条当麻は第三次世界大戦の中心で戦い抜いた。

今の世界を救うために大天使と戦って北極海で空中要塞『ベツレヘムの星』は崩壊

彼は二度目の死を迎える事となる。

ゴポゴポ・・・と冷たい水に沈んでゆく感覚だけが伝わってくる。

不思議な事に息苦しい事は無く、ただ意識だけが薄れて行く

“ここで終わるのか・・・？”

そう思いながら、意識が闇に消えゆく直前に彼の視界は光に包まれた。

その日、織斑千冬は外に出て今年の入学者の事を考えていた。

“アイツがISを使えるとはな・・・”

自分の弟が女性にしか扱えないISを使った事も何かの因果か・・・

そう思っていると、誰かが倒れているのを発見した。

“侵入者か……？”

そう思い近づくと、学生服を着た少年である事が分かった。

“何故、こんな所に少年が……？”

だが、良く見れば全身びしょ濡れで顔面蒼白だった。

急いで少年に近寄り、彼の体に触れると尋常ではない程冷たかった。

“何だ、この冷たさは！？冷凍庫にでも入っていたのか！？”

そう思った程、彼の体は冷えていた。

懐から端末を取り出すと、職員室に連絡してから彼を抱えて医務室へと向かった。

その彼の懐から白いネックレスが覗いていた。

何だか温かい……そう思った上条当麻が目を覚ますと、見覚えの無い景色が眼に入った。

「……」

室内を見渡すと医務室らしき所であると判断できた。

すると扉が開き、黒髪の女性が入って来た。

「どうやら気が付いたみたいだな。」

「・・・誰だ？」

当麻の問いに彼女は答える。

「私は織斑千冬だ。」

すると、当麻も自己紹介する。

「上条当麻です。所で・・・織斑さん。ここは何処ですか？」

「ここはIS学園だ。お前はそれも知らないで侵入してきたのか？」

「あい・・・えす学園って・・・何ですかというか、侵入者ってどういう事でせうか!？」

当麻の混乱した様子に千冬は彼を落ち着ける。

「とにかく落ち着け」

「はい・・・すみません」

落ち着いた彼に千冬は問う

「で、お前は どうしてこの学園に倒れていた？」

「分かりません。北極海に沈んだと思ったら、ここに居たんです。」

その言葉に驚く千冬

「待て、北極海にその恰好で沈んだのか!？」

「ええ・・・沈む要塞を操作するために・・・そう言えば第三次世界大戦はどうなりましたか？」

その言葉に千冬は違和感を覚える。

「第三次世界大戦だと？」

「はい、学園都市とロシアの戦争です。知りませんか?ここって日本ですよね?」

「・・・上条、お前の知っている事を全部話せ」

当麻は自分の住んでいた世界について話した。

学園都市、超能力、魔術、ローマ正教、魔術と科学の対立、これまで戦って来た事件

どれも荒唐無稽で信じがたい話だったが、当麻の眼は嘘をついているようには見えず、事実を淡々と述べているように見えた。

「そうか・・・どうやらお前の言っている世界とこの世界は違う様だ。」

「へっ?それってどういう事ですか?」

不思議そうにする当麻に千冬は自分たちの世界について教える。

IS、白騎士事件、女尊男卑、等々……

「嘘だろ……異世界なんて……」

衝撃を受けたように固まる当麻

その表情は約束を守れなかった事に対する自責の念に満ちていた。

絶望したような当麻を見て、千冬は言う。

「お前の持ち物を調べさせてもらったが、変わったものと言えば携帯電話か……」

そして、と千冬は続ける。

「このISをお前が持っていた事だ。」

千冬が取り出したのは、中央に青い宝石が詰められた白いネックレスだった。

「えっ？俺、ISなんて持って無いですけど……」

「お前の服に入っていた。そして……お前が操縦者として登録されていた。しかもノーナンバーだ。」

そして、彼女は言う

「お前はこの学園に入学してもらつ。学費も免除、生活費も国から出る。」

当麻は問う

「何かあるんですよね？この不幸の体現者であるカミジヨールさんにそんなうまい話が転がってくる筈がない」

「貴重な男性操縦者のデータ収集と研究だそうだ。解剖はされないだろうがな・・・」

「はあ・・・まあ解剖は勘弁ですけど、データ位なら・・・」

そう言つて了承する当麻。

「では、ついて来い」

「分かりました・・・」

そう言つて当麻は用意された制服に着替え、ついて行った。

格納庫に来た当麻は千冬と、もう一人の教師、山田真耶と一緒にいた。

「ISSの機動行つ。装着するときには念じればいい」

「はい・・・えっとコイツの名前は・・・？」

「ああ・・・『ヤルダバウト』という名らしい」

「そうですね・・・」

当麻は胸にあるペンダントに念じる。

「展開！！」

当麻の体が光に包まれ、頭部から出ている髪の毛が特徴的な、赤を基調とした武者の様な外見のISが装着されていた。

露出は眼以外は無く、かなり珍しい外見だった。

「これがISか・・・」

「全身装甲とは・・・」

当麻は自分の感覚を確かめるように手を握ったり開いたりしている。

「次は飛行試験だ。飛んでみる。」

「分かりました。」

地面を蹴って一気に飛び上がった。

「うおオッ！！？」

出力が高すぎたのか、体制を崩してしまう

「落ち着け、出力を調整しろ。」

「は、はい……くっ……」

千冬の言葉に従い、ゆっくりと出力を調整し空中で静止する。

すると、慣れてきたのか、自在に飛び回る。

その様子は飛んでいると言うよりは、見えない足場を跳んでいる様だった。

「凄え……これがISか……」

当麻は感慨深く呟いた。

「次は戦闘テストだ。ターゲットを破壊しろ」

「はい……えっと……こうか」

すさまじい速度でターゲットに接近して、殴る蹴るの怒涛のラッシュを決める。

「一応、手からエネルギー波を放てるらしいぞ。」

「やって見ます。」

拳からビームのイメージと廬山昇龍霸のイメージを合わせて、拳を突き出す。

すると拳から獣を司ったエネルギー波が放たれ、ターゲットを破壊した。

「ある程度の動きを補助してくれるのか・・・」

先ほど使った機神拳も勝手に体が動いたような感じだった。

「最後だ。その機体の最強技『轟覇機神拳』を放ってみろ」

千冬に言われて、最後のターゲットに向かって行く当麻

「『轟覇機神拳』！！」

ターゲットに次々と拳が叩き込まれ、上空に殴り飛ばした後には放たれた巨大な龍の形のエネルギーがターゲットを飲み込んで爆発した。

その威力はアリーナの壁を簡単に破壊してしまった程だった・・・

「・・・・・・・・えっと弁償って事は・・・」

「安心しろ、それは無い。が、その技はIS戦に使うな」

「はい」

これでテストは終了した。

しかし上条当麻が苦勞するのは、これからだった。

「こんな電話帳みたいな本を覚えろなんてカミジョーさんには無理過ぎますって！！」

「無理でも覚えろ。私と山田先生が協力してやる。」

「いやいや！上条さんは元の世界でも英語の小テストが二十点のお馬鹿なんですよ！？」

「つべこべ言わず覚える。いいな」

「はい……」

千冬に殺気混じりに言われて、当麻は参考書相手に悪戦苦闘する破目になるのだった。

真耶が“私も手伝うから、頑張ろっかね？”と言ってくれたのが救いだった。

そして、入学式の日

千冬は一組の全員に言う。

「さて、もう一人このクラスに入ってくる奴がいる。入れ」

戸が開き、入ってきたツンツン頭の少年を見て、織斑一夏は驚いた。

「男……？」

すると次々と黄色い声が沸きあがる。

「嘘！二人目の男性操縦者！？」

「意外とかつこいいい!!」

それを千冬は黙らせ、当麻は自己紹介をする。

「上条当麻です。特に趣味はありませんが、不幸です。よろしくお願ひします。」

「いや、その自己紹介はどうなんだ？」

千冬が当麻に突っ込みを入れる。

「よろしくな、俺は織斑一夏。一夏でいいよ。」

「ああ、上条当麻だ。普通に当麻って呼んでくれ」

男二人、一級フラグ建築士二人が友情を結ぶ。

「よろしくね〜カミヤん」

「えっと・・・のほほんさん。その名は・・・」

「上条だからカミヤん。いいでしょ〜?」

のほほんさんから嘗てのあだ名を呼ばれる上条当麻

「よろしくな篠ノ之!」

「筭で構わない。」

「そうか、じゃあ俺も当麻でいいぜ。よろしくな篤!!」

「よろしく当麻」

一夏のファースト幼馴染と友好を結ぶ当麻

「お前は代表候補生なんだろ! だったら他の国や人間を侮辱なんてするんじゃない!!」

「決闘ですわ!!」

「いいぜ・・・お前が人を見下すってんなら、まずは、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

「あの・・・俺は・・・?」

出番や台詞をとられる一夏。

「よろしくお願いしますわ。一夏さん。当麻さん。」

「ああ・・・」

「よ、よろしくな」

“こいつ等、同類（フラグ野郎）か!!!”

同時に立つフラグと衝撃の事実に気づく篤

「中国代表候補生、鳳鈴音! 今日宣戦布告に来たってわけ!!」

“何か御坂みたいな奴だな・・・”

やって来た一夏のセカンド幼馴染に自分を案じてくれた少女を思い出す当麻。

「行くぜ、お前が俺の友達に手を出すって言うなら、そのふざけた幻想をぶち殺す!!」

鈴と一夏へと襲い掛かる不明機に向かって行く当麻

「そんなんじゃないやねえだろ!お前はそのままでもいいのかよ!??」

「仕方ないよ。僕の言葉を聞いてくれる人なんて・・・」

「誰もいないんだったら、俺がお前の言葉を聞いてやる!」

「僕の言葉を聞いてくれるの・・・?」

「ああ、だから自分に救いが無いなんて言うな・・・そんな幻想、俺がぶち殺してやる。」

「俺も協力する!」

「ありがとう、一夏、当麻・・・」

フラグは基本二つ同時に立つ。

「お前たちを纏めて私の嫁にする!!」

「ええっ!!!??ちよっ・・・!??」

「はあああああつ!!?!?」

ラウラの言葉に混乱する二人。

「いちかあああ!!?!?とうまああああつ!!?!?」

「不幸だああああつ!!?!?!?!」

怒れる鈴に銀髪のシスターを思い出す上条

「どっちが似合うと思う?」

「いや・・・その・・・私めは黒の方が・・・」

「赤くなって、可愛い所があるじゃないか」

「カミジヨーさんに、これ以上この空気に耐えるというのは拷問なんです!?!?」

千冬にまでフラグが・・・?」

臨海学校で

「あ・・・」

「きゃああああ!!?!?」

シャルに当麻のラッキースケベが発動、水着が取れる。

「一夏さん・・・当麻さん・・・一体どっちにしたら・・・」

「うっ~~~~~悩む」

「僕も決められないよ・・・」

「二人とも私の嫁だ。」

箒以外に一夏と当麻のフラグが建っている。

「うおっ！？織斑先生、これは一体！？」

「騒ぐな、あいつらが起きるだろうっ？」

「ちよっ！？何このパラダイス！？夢じゃないんですか！？」

束と当麻は出会う。

「これを使えば、元の世界に帰ることが出来るよ？」

「俺は・・・」

そして迫られる選択

とある上条のIS・・・連載未定！！

とある未来からの子達 (前書き)

とある系が好きなので、ストックは多いです。

三連続ですが・・・どうぞ

とある未来からの子達

とある施設に数名の人影が居た。

「ここまでだ。おとなしく降参すれば命までは奪わない」

男に日本刀を突き付ける青年

しかし、男は不敵に笑うと

「おのれ・・・貴様ら等に誰が降参するものかア!!」

施設全体が大きく揺れる

「なッ!?!」

「貴様らも道連れに来てもらっぞ!!」

そこへ二人の男女は駆けつける

「兄様!」「兄貴!」

「全員に伝える!ここは自爆する!」

青年は二人に告げる。

「ははははははは!!」

「!」

少年の方が右手を壁に描かれた魔法陣を殴りつける

バギンとガラスが砕けるような音が響く

「なっ！揺れが止まらない!？」

「無駄だ！陣の一つを潰した所で、この術は消えないぞ！」

だんだんと施設の揺れが大きくなってゆく

「終わりだ!!！」

閃光と共に施設は跡形も無く吹き飛んだ

外で待機していた魔術師達により周辺の被害無し

しかし、制圧に向かった三名の死体は見つからず、消息は不明

.....

青年が目を覚ましたのは薄暗い路地裏だった。

「う・・・ここは？」

起き上がり、周囲を見渡すがどこにでもあるビルの路地裏の風景だった。

「優、神陽（ゆう、しんや）」

二人の姿を探すが見当たらない

青年は冷静に思考を巡らせる。

（ 一体何があった？ 防御結界を優が張ったとはいえ、どうして無傷なんだ？ そもそもここはどこだ？）

ここで一旦思考するのを止めた。

（ まずは情報だ。ここで考えるにも情報が足りない）

黒い修道服を上着代わりにTシャツ、ジーンズ姿の青年は身の回りの物を確認する。

（ 財布、弾倉、リボルバー二丁、天叢雲剣、草薙剣、ケータイは・
・繋がらないか）

二振りの剣を、金具で腰に固定すると彼は表の通りの方では無く、
上へ跳んだ

ビルの壁を蹴って屋上まで飛び上がると周囲一帯を見渡す。

「成程、ここは学園都市か・・・に、しては随分と建物が少ないな？」

彼は飛行船の掲示板を見て、啞然とした。

「なッ！？ 馬鹿な・・・」

何故なら、その掲示板に映し出されていた日付の年は二十年も前だったからだ。

.....

「う・・・うん？・・・兄貴！優姉え！」

公園で目覚めた紅茶色の茶髪をしたツンツンした髪型の少年は起き上がり、兄と姉を呼ぶが近くには居なかつた。

「くそっ、ここは何処だよ？」

辺りを見回すと自販機を見つけた。

「あ？・・・何で、今はプレミア付きの『いちごおでん』や『きなこカレー』が売ってんだ？」

とりあえず喉が渴いていたので小銭を入れてボタンを押すが何も出てこない

「はあっ！？ちよっ、ふざけんな！」

ボタンをバンバン叩いても飲み物は出ない、返却レバーを引くが小銭は戻ってこない

「あああああっ！！！畜生、不幸だあっ！！！」

「何、騒いでんのよ?」

そこにやって来たのは少年と同じ紅茶色の茶髪に常盤台の制服を着た少女

「……美春?」

「私の名は御坂美琴だつて言つてんだろ?」

「うわっはあ!!?」

条件反射で右手を突き出し無効化する少年

「アンタはいつもいつも人をビリビリ呼ばわりして!!」

感情が昂っているのか、体中からバツチンバツチン漏電している美琴

「ちよつ、待て!何で美春が母さんの真似してんのか分かんねえんだけど!」

「だから私は御坂美琴だつて言つてんでしょ?」
「んってどういう事よ!」

「え……?」

じいじいいつと穴が開く程、美琴を見つめる少年

「な、何で見つめてくんよ!」

結構美形でワイルドっぽい感じの少年に見つめられて、少し赤くなる美琴

「・・・え、嘘だろ？まさか、マジで御坂美琴？」

「さつきから、そうだって言ってるんでしょーが！ー！」

Oh、アンビリイバボウと言った少年は事態を把握した。

「ふ、ふ、ふふ・・・」

「ふ？」

「不幸だああアアアアアア！ー！！ー！！ー！！ー！！ー！！」

少年は父親の口癖を叫んだ。

.....

そして、優と呼ばれた少女も目を覚ました。

「う・・・ここは・・・？」

どうやら、どこかの部屋だった。

「気が付いたので御座いましょうか？」

「貴方は・・・」

少女が声を主を見ると、ぽやぽやとした空気を纏ったシスターがいた。

彼女の名前を少女は知っていた。

「オルソラ・アクイナス？」

「あら、私の名前をご存じなので御座いましょうか」

「ええ、というかオルソラさん、なんだか若くなって・・・っ!？」

「どうかしたので御座いましょうか？」

少女はベッドの横にあった時計を見て震えていた。

「今つて、****年ですか？」

「はあ、それで御座いますか？」

「ははっ・・・ふ」

「ふ？」

「不幸です。」

父親である。少女はとある少年の口癖をボソリと呟いた。

.....

食堂へと来てみるとシスター達が自分を見ていることに気が付いた。そして少女の前には自分とそっくりな黒髪ポニーテールの美女、神裂火織がいた。

「さて、貴方には質問したいことがあります。」

「なんででしょうか？」

「貴方は何者ですか？」

「私の名は上条優、敵の魔術によって未来から来ました。」

「なっ!?!？」

その言葉に驚きを隠せない神裂

「私が持っていた七天七刀は貴女から受け継いだ物ですよ？」

「・・・確かにあれは七天七刀でした。私の物とも完全に一致します。」

その後の質問では所属や目的を応えさせられた。

「いや、目的って言われましても、事故でここに来たのですから帰る事でしょうか？」

優がイギリス清教所属だったこともあり、イギリス清教女子寮に滞

在することになった。

事務的な会話が終わった後、アニーゼがふと気になった事を聞いてきた。

この場にいた女性が最も気になっていた事を

「そういえば、アンタは上条って苗字なんですよね？」

「ええ、そうですが？」

「なら、父親の名前は・・・」

「ええ、皆様ご存知の上条当麻ですよ？」

「……ッ!!!?!?」「」「」

一斉に女性たちが反応する。

「ちなみに母親は神裂火織ですよ。お母様」

ニツコリと神裂に笑いかける優

神裂は顔を真っ赤にして動揺していた。

「ですが、あの場にいた人物限定なら、あと三人がこの世界に来て
いますね」

「三人ですか？」

「ええ、我が兄である天光お兄様と弟である神陽の二人、それと私たちが討伐しようとしていた魔術師です。」

.....

学園都市に転移していた上条天光は腹違いの弟である神陽の不幸ボイスを聞きつけ、聖人の脚力を發揮して目の前に飛び降りた。

「大丈夫か、神陽」

「兄貴!!」

そして、その場にいた御坂美琴は突然降ってきた男の出現に驚いていた。

「あんだ何者よ？」

「未来から来た貴方の腹違いの子供です。」

「は？」

御坂美琴はフリーズした。

.....

数分後、再起動した美琴は「腹違いの息子ってどついう事よ!!!!?」

って言うか、コイツが私の子供なの!!!？」

とものすごい剣幕で聞いてくるので天光が質問に全て答えると

「そ、そう、私がアイツと結婚かぁ・・・ふふっ、えへへへ」

と幸せオーラMAXの乙女状態になり

「ちょっと待って、腹違いってことはアンタは私の子供じゃないの？」

その質問にも答えたら

「あんのスケベ野郎がアアアアアアツ!!!」

とキレた。

(そう言えば親父が言ってたな母さんの学生時代はいつもビリビリ
していて、感情が昂るとすぐビリビリするって)

神陽が知る母の御坂美琴は感情的な所はあったが、常に冷静さを失
う事無く、能力を制御していた。

いわゆる大人の余裕だ。

しかし今、神陽の目の前にいる御坂美琴は思春期真っ盛りの少女で
あり、幼少期に於いて大人に成らざるを得なかったが故に感情的な
所が完全では無い

もうバチンバチン体中から電流が迸っていた。

（ そりゃあ、親父が苦勞させられるわけだ ）

上条当麻の子供たちは父親の活躍を幼少の頃より聞かされ、母親達の苦勞を聞かされてきた。

そして今、尊敬する父親が武勇伝の始まりである時代に来て父親の凄さと母の苦勞の一端を感じていた。

天光や優、その他の子供たちは父親である上条当麻を尊敬している。

だが、御坂美琴の長男である上条神陽は父親に瓜二つと言っても良い容姿であったが為にコンプレックスになっていた。

だから父親に他の兄弟みたいに甘えないし慕わない

父のような人間になろうがなるまいが自分は自分だ。

心の中では尊敬もしているし誇りに思っている。

でも、甘える事はしない、学校生活では喧嘩したりして不良呼ばわりされることもある。

自分では気に食わない奴をブン殴っているだけだと言っているのだが
実際には困っている人間を救う為である。

本人にしてみれば力を持っている奴が自分より弱い奴を虐げて偉そうにしているのが気に食わない

力を持つ本当に強い奴は自分より弱い相手を虐げたりしない

そんな考えを持っており、

どちらかと言うと中身や考え方が親父の友人でありライバルでもある一方通行に似ている。

その癖、助けを求める声があるとなんだかんだ言っただけで親父の様に全力で救おうとする。

妹の美春に「それ何てフュージョン戦士？」と突っ込まれた。

つまり、本人は無自覚に中途半端に一方通行の振りした上条当麻みたいな事になっている。

さて、怒り狂う電撃姫を抑える為に右手を構える

このままでは上条当麻が父親になる前に生命の危機だと言う事で必死に説得することになるのだった・・

これから始まるのは、未来からの子供たちの物語。

とある未来からの子達 (後書き)

今回は前々回とつながっているとと言える話です。

まあ、どうかは決めてませんし、思いつきですので細かい事は気にしないで下さい

聖闘士上条（前書き）

これは活動履歴で書いたものの本編です。

聖闘士上条

学園都市に住むツンツン頭の少年、上条当麻には兄弟が十五人もいる。

全員が父、上条刀夜によって拾われた子供であり、両親とも区別することなく

皆を受け入れてくれた。

そして、今に至る。

学園都市にある広い屋敷に彼らは住んでいた。

「なあ、当麻」

「なんだ、レグルス」

「屋敷の薔薇園にシスターが干されてた。」

同い年の上条の義兄、茶髪の少年、レグルスが白い修道服の少女を抱えていた。

すると少女が目を覚ました。

「お、起きたか」

「お・・・す・・・た」

「ん？何だつて？」

「おなかすいた」

その言葉と一緒に彼女の腹が鳴った。

「飯、食つか？」

「うん」

即答だった・・・

ガツガツムシヤムシヤモグモグ

もの凄い速度で大量の食事を平らげてゆく少女

「とりあえず君は誰だい？」

「私の名前はインデックスっていうんだよ」

明らかに偽名っぽい本人がそう言うならそうなのだろうと納得する二人

「所でどうしてお前はあんな所に干されていたんだ？」

「追われていて、上手く飛び移ろうとしたんだけど、撃ち落とされちゃって・・・」

「追われている？ 誰に？ 警備員か？」

インデックスは外の人間だ。外との交流を厳重に制限されている学園都市に侵入するなど、簡単なことではない

「ううん違うよ、魔術師に追われているの」

魔術師、その単語に覚えのある上条兄弟はため息をついた。

「最近、魔術と関わる事が多いな」

「ああ、これは兄貴達に話さないとな」

全く動じず、魔術に関わる事を日常茶飯事のように言う二人に驚くインデックス

「魔術を知ってるの!？」

「ああ、あれは五年前の海外旅行の事だった・・・」

回想

「なんだあれ？」

それは殺しの場面に当麻が偶然出くわした時だった。

「あん？人払いの结界を張った筈なんだがな・・・まあいい、悪いが死んでくれ」

男の手には剣が握られており、もう一人の男の手からは炎が出てきていた。

その時、当麻は怯えて動けなかった。

そこへ

「私の弟に何をしている？」

「大丈夫か？当麻」

そこに現れたのは上条家三男のシオンと六男のサガであった。

「おいおい面倒を増やすなよ」

「成程、魔術師か・・・」

「へえ、魔術を知ってるのか・・・それじゃ消えな！！」

男から放たれた魔術の炎がシオン達に襲い掛かる。

「クリスタルウォール！」

次の瞬間、男たちを包むように現れたガラスのような半球状の壁が炎を跳ね返した。

「なっ！！ぎゃあああああっ！！？」

自らが放った炎を浴びて転げまわる男

「なあっ！？お前等は超能力者なのか！？」

「違うな」

「私の弟を傷つけようとしたのだ。許すつもりはない、アナザー・デイメンション!!」

「うわあああああ!!」

サガが放った技によって異次元に飛ばされる魔術師二人

「大丈夫か？」

「うん、ごめんシオン兄ちゃん、サガ兄ちゃん」

「いや、当麻が無事ならば良い、みんなの所へ戻るぞ」

「うん!!」

回想終了

「……と、まあこんな感じか」

「貴方のお兄さん達って一体何者？」

「黄金聖闘士だけど？」

「知らないんだよ・・・」

その後、当麻が右手で彼女の服をバラバラにしてしまいました。

「んで、どうするんだよ？シオン兄達は今日は遅くなるって言う」

てたぞ？」

レグルスがやれやれと頭を掻きながら言う

「アスミタは？」

「あゝ、多分どっかで瞑想でもしているんじゃないか？」

すると

「帰ったぞ」

「ちゃんと良い子で留守番してたかあ？」

「・・・」

「ああ？」

高校二年の兄貴達が帰ってきた。

「」「」「」

インデックスを見て、固まる四人

「あゝ、お前等・・・流石にその歳は犯罪じゃねえか？」

「待てマニゴールド兄貴、誤解だ！！・・・って、無視して部屋に戻ろうとしないでください、アルバフィカ兄さん！！」

「ハッ、やるじゃねえか当麻、熱く滾ってるなあ」

「カルディア兄貴、誤解だっって言ってるんだろ!!」

「落ち着け当麻、冷静になって説明してくれ」

「おお、カミュ兄さん、聞いてくれ」

当麻は兄弟達に大まかな事情について説明した。

「ん、なるほどな・・・つまりこのガキを魔術師から守ればいいんだな？」

「まあ、そういう事だな・・・」

「お前が拾ったんだからお前が守るんだな」

「分かってるよ、カルディア兄貴」

すると、インデックスが聞いてきた。

「ねえ、貴方たちはみんな違う国の人に見えるけど兄弟なの？」

「ああ、兄さんたちは皆、家の親父が引き取って連れてきたんだ。」

「あのオッサン、次々と増やしてきて、気付いたら十六人兄弟だったな」

「そうなんだ、何かごめんね」

「別に気にしなくていい」

インデックスにカミュが言う

「私、もう行くね」

「……………はあ？」

インデックスの唐突な発言にみんなが固まる。

「ちょっと待て、お前、出ていく気が？」

「うん、いつまでもここにいると敵が来ちゃうし、貴方たちだつて部屋ごと爆破されたくないでしょ？」

「されたくないが、お前を放り出して『はい、おしまい』なんて事はしたくない。

まだ魔術師達がうろついているなら、ここに居れば安全だ。」

ここはかつて女神アテナを守護していた黄金聖闘士十五人の内八人が住む家、

例えば相手が冥闘士、海闘士でも最強クラスの奴らを連れてこないと

まともな戦いにすらならない

「ううん、ダメ。この『歩く教会』は魔力で動いてるからね
教会は神力って呼ばせたいみだけけど、同じmanaだし。つまり簡

単に言っちゃえば、敵は『歩く教会』の魔力を元にサーチをかけてるみたいなんだよ」

「厄介だな。でもだったら何でそれを捨てないんだ？」

「だってこの防御力は法王級だから。もっとも君の右手に粉碎されちゃったけど」

「ああ、それは悪かった。けどだったらその発信機みたいな機能も完全に消滅したんじゃないか？」

「だとしても『歩く教会』が壊れたっていう情報は伝わっちゃうよ。さっきも言ったけど『歩く教会』の防御力は法王級。簡単に言っちゃえば『要塞』みたいだね。……。私が敵なら『要塞』が壊れたのが分かれば、理由はどうあれ迷わず打って出ると思う」

ならば、上条家の人間がやることは決まっていた。

「そうか、今ので決まった。お前を放っておくわけにはいかない」

当麻の言ったことはおかしかったのか、インデックスはキョトンとした顔をしている。

「……。じゃあ、私と一緒に地獄の底までついてきてくれる？」

にっこりと浮かべた笑顔は辛そうで、これ以上関わるなど言っていた。

だが、ここに居るのは前世で女神アテナを守っていた聖闘士達

「フツ、君一人守れずしてアテナを守れる筈がない。」

「まあ、そういうことだ。」

「カミュ兄さん、マニゴールド兄貴・・・」

アクエリアス キャンサー
水瓶座と蟹座の黄金聖闘士が、

「俺たちをあんまみくびるんじゃないやねえぞ？」

「少しは私たちを頼ってほしいものだ。」

「カルディア兄貴・・・アルバフィカ兄さん・・・」

スコレピオン ビスケス
蠍座と魚座の黄金聖闘士も

「俺も忘れんなよ！」

そして、若き獅子座^{レオ}の黄金聖闘士も加わる。

「レグルス・・・よし・・・」

くるりとインデックスの方へ向くと

「ほら、みんなついて行く、いや、お前を救い上げる気だよ」

「っ！？貴方達、ちゃんと分かっているの！？私に関われば死ぬかもしれないんだよ！？」

「ハッ、俺たちを誰だと思っているんだ。お嬢ちゃん？」

カルディアが好戦的な表情を浮かべてインデックスを笑う

「戦いの女神アテナを守護する聖闘士の最高実力者、黄金聖闘士だぞ？」

カミュがクールに言い放つ

「女神アテナ！？貴方達は本当に何者なの？」

「だから、黄金聖闘士だ。」

「聖闘士なんて知らないんだよ！」

「君が言うべきことは拒絶でも質問でも無い。ただ一言だけだ」

アルバフィカがインデックスへ優しく語りかける。

「・・・！！」

インデックスは今にも泣きだしそうな表情だ。

「ああ、一人で何でも背負い込むな、みんなで背負えば辛く無いさ」

「っ！・・・本当に馬鹿だよ、貴方達」

「ああ、馬鹿で構わない。だから少しは俺たちを頼れ」

「っっ、あ、ああああっ！！！」

とうとうため込んでいたインデックスの涙がこぼれ出した。

当麻は彼女が泣き止むまでしっかりと抱きしめるのだった。

（やるじゃねえか、当麻）

（流石はフラグ野郎ってトコか・・・）

それをニヤニヤと眺めている兄貴が二人いた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

あその後、夕食の買い出しに当麻が行くのでインデックスも一緒に来た。

「ねえねえ、とうま。これ買って」

「ああいいぞ・・・って、高っ!？」

「ダメ？」

インデックスが菓子やケーキを大量にカゴに入れてくるので

出費がかさむ事に頭を悩ます当麻

その光景を後ろから微笑ましく思っているのはアルバフィカであった。

どうして彼が一緒なのかというと、万が一の為と今日の買い出しの当番だからである。

助けてとインデックスの上目使いに負けそうになってアルバフィカに助けを求めると

「当麻、少しは年下の我儘を聞いてやるのも年上の務めだぞ？」

ニヤリと当麻に笑いながら言うアルバフィカ

「なっ！・・・アルバフィカ兄さんまで・・・」

普段、あまり笑わず、素っ気ない事が多い兄が珍しく笑っているので

当麻の退路は塞がれていた。

それにしても相変わらず凄い美形だな、と当麻は思う

今もこの兄の存在が周りの注目を集めている。

しかし兄自身はこの外見で判断されることを嫌っている。

今も周りから、凄い美形だのカッコいいだのと囁かれているが

彼自身にしてみればあまり気分の宜しく無いものだろう

(モテるけど見た目だけで判断されるってのはな・・・)

当麻自身、兄達全員美形揃いでモテることは知っている。

しかし大方の人が彼らの外見のみで判断している為、まだ誰も彼女がいない

当麻自身など顔立ちは整っていると言われるが、それ以上に兄弟たちが美形なので

自分はモテるという自覚が無い、実際は彼の優しさに惚れる女性はかなりいるのだが・・・

(まあ、別にいいか)

当麻は思考を中断して、今は籠の中に入った大量の菓子類をどうするかが先決だった。

「とうま〜これも買って〜」

「どあああっ!?!?こんなに買わせておいて、まだ食う気かよ!」

「自腹で買うんだぞ?」

アルバフィカの一言がとどめとなった当麻は真っ白に燃え尽きた。

聖闘士上条（後書き）

聖闘士上条の設定もついでに掲載します。

大学生の兄貴たちは一人暮らしです。

聖闘士上条 設定（前書き）

設定集です。

聖闘士上条 設定

黄金聖闘士達はそれぞれの聖戦で散った後、転生していた。そこで気づいたら上条家の養子となっていた。

・上条ハスガード

上条家長男、28歳、精神的に大人であり兄弟たちのまとめ役、孤児院で兄弟たちを纏めていた所を刀夜に拾われる。正確には孤児院での繋がりである。警備員をやっている。大学の講師をやっている。

・上条童虎

上条家次男、20歳、大学二年生、やっぱり武術の達人、精神的に老成しているが子供っぽい所もある。中国系ハーフ

・上条シオン

上条家三男、20歳、大学二年生、まともな性格。チベット系ジャミール族ハーフ

・上条シジフォス

上条家四男、19歳、大学一年生、優しく、皆のお兄さんの存在、

ギリシヤ系ハーフ

・上条アスプロス

上条家五男、19歳、大学一年生、遺伝子疾患の為、純白の髪の毛、サガと同じ大学に通っており、外科を専攻している。双子座の冥衣を持っている。四つ子の長男、カエル顔の医師の師事している。ギリシヤ系ハーフ

・上条サガ：

上条家六男、19歳、大学一年生、家計を管理している母親的存在、前世の事から大学は脳医学系を専攻している。双子座の冥衣を持っている。四つ子の次男、ギリシヤ系ハーフ。現在、木山春美と同棲中

・上条デフテロス

上条家七男、19歳、大学一年生、アスプロスとは和解している。内科を専攻している。ギリシヤ系ハーフ

・上条カノン

上条家八男、19歳、大学一年生、現在はイギリスのケンブリッジ大学に留学中、海龍の鱗衣を持っている。ギリシヤ系ハーフ

・上条シュラ

上条家九男、19歳、大学一年生、前世と大して変わらない、ストイック、スペイン系ハーフ

・上条アルバフィカ

上条家十男、17歳、高校二年生、絶世の美形、先天的遺伝子異常で空色の髪、毒の血液ではなくなったが、体内で自由に毒物を生成できる特殊体質+耐毒体質、心優しく他人との触れあいに飢えている。スウェーデン系ハーフ

・上条マニゴルド

上条家十一男、16歳、高校二年生、不遜で傲慢な性格だが兄貴的な性格で面倒見がいい、料理が上手い、イタリア系ハーフ

・上条カルディア

上条家十二男、16歳、高校二年生、結構血気盛んな性格で、狩人みたいな一面がある。とにかく熱くなれる事を探している。よく喧嘩をしたりしている。ギリシャ系ハーフ。少々、歪んでいて壊しがり屋

・上条カミュ

上条家十三男、16歳、高校二年生、常に冷静な性格だが、当麻を氷河と同じように扱っており、当麻が水瓶座であることも加えて兄

バカ+師バカである。フランス系ハーフ

・上条アスミタ

上条家十四男、15歳、求道者、盲目では無くなっている。仏教徒、魔術サイドでは聖人である。イギリス系インド人クォーター

・上条レグルス

上条家十五男、15歳、活発で明るい性格、ギリシャ系ハーフ

・上条当麻

上条家十六男、15歳、原作と同じく不幸であるが、十五人の兄たちの支えによって、精神的にも肉体的にも強くなっている。迂闊な失言によって、よくシオンやサガから弾幕ゲーム的教育をされている。上条の裏人格には『神浄』が眠っているが幻想殺しによって力の大半を封じられている。
カミュから氷河的扱いを受けている。

・聖衣について

『天使の力』による天使の装備と同じだが、神が直接作ったものなので純度や質が全く違いすぎる。

・神浄

どの宗派にも神話にも属さず伝わってもいない、神かどうかすらも不明の神的存在、一説には概念的存在ともある。

・カップリング予定

当麻×美琴・インデックス・五和、

レグルス×姫神

アルバフィカ×神裂

デフテロス×シエリー

カノン×オリアナ

カミュ×アンジエレネ

サガ×木山

童虎×オルソラ

アスプロス×ローラ・・・？

マニゴルド×吹寄・・・？

カルディア×佐天

ハスガードやアスマタは・・・未定

聖闘士上条 設定（後書き）

こんな感じです。

美しき真祖と魔法使い（前書き）

ネギまの世界にMyオリジナル設定のPCゲーム『ドラクリウス』
一般用ゲーム『ムーンサイズ』の主人公、荻島潤が落ちる話です。

美しき真祖と魔法使い

銀の長髪に女性と見紛う程の美貌を持つ、ウィルス型の吸血鬼の真祖ブランドル家の当主である荻島潤は虚数空間の回廊を歩いていた。

だが次の瞬間、回廊に穴が開き落ちて行った。

「ちよっ!?!うわああ!?!」

その日、麻帆良はいつも通りの日々が続いていた。その中にこの世界の真祖の吸血鬼であり『福音の闇』の異名を持つエヴァンジェリン・A・K・マクダウエルは退屈そうにしていた。

(やれやれ、何時になればこの呪いは解けるのだろうか・・・)

そう思いつつ、自らの邸宅に足を進めると、轟音と共に侵入者を感知した。

「侵入者か!」

彼女は急いで侵入者の元に向かった。

と獣じみた声を上げて力任せに上半身を引っこ抜いた。

「ふう、死ぬかと思った。」

銀の長髪に赤い瞳、絶世の美形と言っても差し支えない少年：潤が現れた。

そして、周囲を確認するように辺りを見回し、エヴァと茶々丸を見る。

「すみません、ここはどこですか？」

「ここは麻帆良学園だ。」

エヴァが潤に答える。

「貴様は誰だ？世界樹の魔力が目的の侵入者か？」

エヴァが冷静に潤に聞く

「俺の名前は荻島潤。それと世界樹・だっけ、あの程度の魔力なんて大した事無いよ？」

不思議そうな顔をして潤はエヴァの問いに答える。

世界樹の魔力が大した事無いと言う潤の言葉にエヴァは驚きを感じつつ、続ける。

「とりあえず、学園長のジジイの所へ連れて行く、話はそこでだ。」

「そう、分かったよ、ところで君の名前は？」

「私の名はエヴァンジェリン・A・K・マクダウエル」

「絡繰茶々丸です。マスターのサポートをしています。」

「ん、よろしく」

潤はエヴァと茶々丸に案内されながら学園長の元に向かうのだった。

潤は目の前の老人に驚いていた。

その横には三十台のメガネをかけた渋いダンディな男が居た

一言で表すなら妖怪のぬらりひょん、そのものの外見である。

「フオフオフオ、儂がこの麻帆良学園の学園長、近衛 近右衛門
じゃ」

「僕の名前はタカミチ・T・高畑だ。」

「荻島潤です。」

「さて、君は何故世界樹の所に居たんじゃ？」

「墜ちたからです。」

「……どういふことかの?」

潤は簡単な説明をする。

虚数空間に通路を作って、世界に対する異物を除去する為の機関に所属して

様々な世界を渡り歩いているのだと

何故にか通路に穴が開き、そのまま地上へ落ちて地面に激突したと

「……よく無事じゃったな」

「ええ、一応吸血鬼の真祖ですから」

「何と!」

ビックリしたような表情で近右衛門は声を上げた。

「そうか、そのエヴァンジェリン君も真祖の吸血鬼なんじゃよ」

「そうなんですか?」

へえ……と驚いたようにエヴァアを見る潤

「所で、お主はこれからどうするつもりかの?」

その問いに潤は悩んだ。

「どうしましょか・・・この世界に干渉するのは余り宜しく無いとは思うんですけどね・・・でも虚数回廊を修復はやたらに時間がかかりますし」

本気で悩んでいた。帰れるものなら即座に帰りたい、だが最低でも数か月、最長で数十年はかかる。

潤は本気で困った顔をして答えた。

「ならば、ここで警備員をしてくれんかのう？」

「警備員ですか？」

「そうじゃ、ここは多くの魔法関係者が集まる有名所じゃ、昼に一般市民、夜には魔法関係の護衛をやってもらいたいんじゃないが・・・勿論タダとは言わん、衣食住の方を用意するし、給料もでる。」

「・・・色々と有り難いです。やりますと言っか、やらせて下さい」

「決まりじやのう、ようこそ真祖、荻島潤殿 貴方を麻帆良は歓迎しよう」

「いや、その、どうも・・・」

少々照れながら、潤はこの世界での職を得た。

「荻島、ここがお前の住む部屋だ。」

「ありがとう、マクダウエルさん」

「私の事はエヴァで構わない」

「じゃあ、俺も潤って呼んでくれて構わないよ」

潤はエヴァに案内されて、彼女の邸宅の一室に住むことになった。

潤曰く、すぐにこの世界から去る存在なのだから極力、私生活での接触は避けたいとの事で、吸血鬼の真祖同士と言う事もあってエヴァの邸宅に住むことになったのだった。

「所で潤、お前は吸血鬼として血を吸うのか？」

「いや、必要ないよ」

お互いに様々な話を話し合った。潤の世界で吸血鬼の事件だったり、ムーンタイズについてとか

「そのムーンタイズとやらは魔法なのか？」

「いや、魔法じゃなくて特殊能力や超能力に入るよ」

「見せてくれないか？」

「いいよ」

潤はムーンタイズの一つ『劣化複製』で持っていた紙を分解して、

木材へと変えた。

「成程凄いな、これほどの事は魔法でも難しいぞ」

エヴァが潤を称賛する。

他にも様々な事について話した。

ある世界での吸血鬼アーカードとの戦い、己のムーンタイズ『完全複製』によって血を吸った吸血鬼の能力を使える事

「チートだな」

エヴァの感想はその一言だった。

翌日、潤はタカミチに案内されて放課後の麻帆良学園を歩いていた。

かなりの大きさを誇る麻帆良学園の敷地の広さは自分が通っていた高校とは比べ物にならない程だった。

敷地内にはこれと同じ位の学校が沢山あるらしい

これほどの大きさの学校が沢山存在するのならば生徒の数も相当だろう

この島に住む一般人も含めれば、一つの国と言っても良いのでは無いのかと思う

部活に励む生徒の姿も見える。

「やっぱり目立ってるね」

「自分の容姿が人並とは言えない事は自覚してますから」

あちらこちらで自分への視線を感じている潤

潤の容姿は腰まで伸ばした銀の髪、女性にも見える中性的な美貌、平均以上の身長、細くスリムな体型

はつきり言えば絶世の美少年である。

そんな彼が思春期真っ只中のティーンズが集う学園に来れば、注目を集めるのも当然だろう

テレビの芸能人でも敵わないレベルの美形が来ればミーハーな生徒の一人や二人ぐらいは見るだろう

「ただ・・・ここまで注目されるとは」

潤の言葉通り、注目する生徒が一人や二人ならば、まだ微笑ましい

だが、数十人単位、下手をすれば三ケタに達するかと言う程の女生徒達が眼をキラキラ輝かせてガン見して来るのだ。

中にはケータイを取り出して写真を撮っている者までいる。

「・・・まあ、サービスくらいはしましょうか」

やれやれ・・・と言ったように潤はカメラ用のニッコリとした微笑

を張り付けて周囲に手を振る。

途端にざわめくギャラリイ達

大方の女子達は芸能人に手を振ってもらえた的な感じで興奮していた。

一部には鼻血を噴いていた者もいたが・・・

「慣れているんだね・・・」

カメラ用の笑顔を張り付けて手を振る潤にタカミチが若干、引きながら言う

「ええ、かなり経験してますから」

これが絶世の美形に与えられた仕事なのだろう

そんなこんなで建物に到着して学園長室にいた。

そこで学園の敷地の地図を見ながら、警備の仕事についての説明を聞いていた。

「そう言えば、侵入者を殺すのは？」

「それはダメじゃ、殺人はNGとされておる」

「俺の担当は地域は？」

「この学園の周辺一帯じゃ」

近右衛門が地図にぐるりと円で囲むように示す。

「分かりました。」

「それと、とあるクラスの副担任もしてくれんかのう？」

その提案に潤は驚く

「あの、俺は教員免許なんて持って無いんですけど・・・」

困った様に言う潤に近右衛門は

「別に其処ら辺は何とかなるもんじゃよ」

（それはいいのか？・・・）

教師としてやっていけるか以前の問題に不安になる潤だった。

美しき真祖と魔法使い（後書き）

チート設定な潤君です。原作後の潤君ですのでかなり強いです。

ある組織に入っているので型月の真祖以上の強さです。

能力的に遠距離攻撃無効、何度倒しても復活する再生力

アーカードの能力追加で無敵すぎます。

自分のノートに書いている最大級の厨二小説（前書き）

上条さんとレイフォンがチート活躍する小説です。

もう無敵すぎて何でもありなので、イタすぎる小説です。

ものすごいキャラ崩壊を起こしています。

レイフォン君は好きな人の為なら世界の二つや三つなんて簡単に滅ぼします。

それで見たいというなら・・・どうぞ

自分のノートに書いている最大級の厨二小説

血まみれの部屋の中に一人佇む少年、荻島潤

彼は吸血鬼の真祖である。

「全く、こういう事は専門じゃないんだけど・・・」

ブツブツ愚痴りながら、廃ビルから出てゆく

「返り血がついてるし・・・はぁ」

取り敢えず、路地裏に入り、空間隔離の術を施すと普段着に着替える。

Yシャツにジーンズ、黒のベスト

こういう格好で繁華街への道に行く

「準一の女の護衛をやるってこと自体がおかしいと思うんだけどなあ・・・」

何か、納得いかないような表情をしながら路地裏から空間をつなげて、自分の執務室へと帰る。

「よっ、お帰り」

「歩武？・・・ここに居るなんてどうしたのさ？」

「いや、日頃から書類に追われていると羽を伸ばしに来ただけど、やること無いから来てみた。」

「そう言われても・・・」

「別にここ居るだけでも結構違うから良いんだけどな」

「そんな物なの？」

そついうもんだ。と言う歩武に潤の感性はイマイチ理解できなかった。

太陽系の宇宙空間に於いて、レイフォンは己の剽で満たしていた。

この様にすることでレイフォンは己の感じる世界を広げ、超広域リーダーの役割を成すのだ。

「転生者狩りだ・・・」

生れ落ちる転生者を外力系衝剽の技『刃鎧』で剽を物質化させ内臓から肉体をぶち抜く

レイフォンは徹底的に転生者を殺している。

憑依する転生者の場合は精神と魂を破壊する。

殺した転生者は元の世界へ強制送還させるか、地獄に叩き落とされるか、消滅させられるかである。

「マヴロス・エラプション・クラスト!!」

大地が裂けて煉獄の業火が転生者達の魂ごと其の身を焼き滅ぼす。

「約束された勝利の剣!!」エクスカリバー 「天地乖離す開闢の星!!」エヌマエリシュ

高火力の斬撃と次元切断がレイフォンに直撃し凄まじい轟音と共に辺り一帯が消し飛ぶ。

「遅い、遅すぎる。そんなんじゃ永遠に当てる事など出来ないね」

空中に浮かぶレイフォンはつまらなそうに吐き捨てると己の『小宇宙』を燃やして高める。

「『ギャラクシアン・エクスプロージョン』!!」

レイフォンから放たれた一撃は空間ごとそこにあつた形在るもの全てを粉碎し殺し尽くした。

後に残るのは破壊され尽くした虚空の空間だけだった。

「ライトニング・ブラスト!!」

「熾天覆う七つの円環!!」ローアイアス

「無駄だ。」

閃光が七つの花卉を貫通し、少年の腹部に叩き込まれる。

「がはあアああアツ!!!？」

そのまま、100m程ノーバウンドで吹き飛ばされる少年

双子座の冥衣を纏ったレイフォン・アルセイフは今現在、転生者と交戦している。

「ふん、君が神からいくら能力を貰ってしようとも僕には勝てない」
レイフォンは転生者に対してはよい感情を持っていなかった。

独善、傲慢、自分勝手、アンチ、

そんな転生者ばかりを見てきたレイフォン自身も、同類なのだろう
と思う

世界樹との契約は世界樹の健康管理して掃除、殺菌する仕事、代わり
に絶対的な力の行使権と世界を自由にする権利を有している。

が、組織はそんな事して癌とか出来たらどうするんだよ!？世界が
崩壊してしまうだろ!？

ということまで好き勝手にする事は限度を守っている。

しかし、転生者は違う

彼はそんなことなど知らない、知ったところで大して気にも留めない

己の好き勝手に振舞う、自分が神であるかのごとく

だから組織の評議会と世界樹は限度を守らない転生者の抹殺を命じた。

「くそつ、なんでお前がこの世界にいるんだよ!？」

「僕は君たちの様な転生者を断罪する役目を世界樹から担った。」

「なッ!？」

やれやれとレイフオンは頭を掻く

「君の罪状は、約三十の平行世界に干渉し正義を気取って虐殺、更に次元世界征服行為

君が行ったこの行為の所為で因果律、つまり世界の栄養やホルモンバランスが崩壊した。

結果、約二百五十四の世界が崩壊を起こした。死者は約八千兆人。

僕の平行世界、当麻の平行世界、なのは達の平行世界、ネギまの平行世界なんか特に酷い」

「な、そんな・・・」

何も感情を移してない瞳でレイフオンは告げる。

「君は唯の独善者だ。」

「煩い、俺は正しいことをしたんだ!俺が正義なんだ!!俺が英雄なんだ!!」

「・・・下らない」

「お前は悪だ！だから俺に殺される！！」

ギャーギャー喚き立てる転生者に呆れるレイフォン

だが、次の言葉がレイフォンを切れさせた

「皆、俺の物だ！！だからお前は邪魔な―ギャああああ！！！！？」

左腕を引き千切られて絶叫を上げる少年

「今、何て言った？」

レイフォンの言葉は氷のように冷たく、凄まじい殺意が籠められていた。

「フェリを？リーリンを？先輩を？メイシエンを？クララを？」

頭を鷲掴みにして地面に叩きつける。

「ウギヤアアアアアアア　　ツ！！！！！！」

こいつは不老不死らしいので死にはしない

「お前のようなクズに違う世界の僕の恋人たちが殺された？汚された？犯された？ふざけんじゃねええええええええエエエ！！！！！！」

両足を引き千切る

「アギヤああああ!!??」

「黙れよ」

顎を砕く

「ゲツ——がプ!？」

更に腹に手刀を突き刺し内臓を引きずり出す。

「+*+ '+>>' ' ' %&{ || >+* }!?!?!???'

凄まじい激痛に血の泡を吹きながらも死なない所か、傷の再生が始まっている転生者

「魂ごと消滅させてやる。」

そして止めを刺すべく構える

レイフォンの体から小宇宙が溢れ出る。

「ギヤラクシアン・エクスプロージョン!！」

「ぎゃあああああああ——ッ!?!！」

そのまま転生者は魂ごと消滅した。

「ふん・・・吐き気がする。」

不快そうに吐き捨てたレイフォンはとある少年の前に立った。

「ふむ、君は・・・特に何もしていない転生者だね。別段そこまで原作崩壊を招いている訳でも無い。主要存在を害した訳でも無い」

セーフだね。とその少年に言うとレイフォンは次元回廊の入り口を開いた。

「・・・武くんアンチは数少ないけど、あのオルタの世界はかなり繊細かつ影響力が高い」

故に、と続ける。

「武君のアンチは存在を許さない・・・消えろ、アナザーディメンション！！」

武ごとオルタの世界を崩壊させようとする転生者を異次元空間に叩き込んだ。

そのまま入り口から元の世界に戻るレイフォン。

「帰ったら汚染獣襲撃って・・・」

それも老生体三期が二体、ついでに幼生体が一万ほど、普通の都市なら詰んだ。

が、ここに居るレイフォンはあらゆる枷が外されている。

レイフォンが放ったギャラクシアン・エクスページョンは老生体を天高く押し上げ、空中で凄まじい大爆発を起こした。

「・・・他愛も無い」

『フォンフォン、貴方はどれだけ反則なんですか？』

レイフォンが愛する女性の一人、フェリ・ロスが念意端子で呆れたような、恐れ混じった様な声で呟いた。

「全ての世界、異世界の中で二番目の強さで人神ですから」

と、にっこり笑顔で答えておくレイフォン

一方その頃、最強と称される上条当麻はと言つと・・・

「子供が出来ました。」

「・・・・・・・・・・・・・・・・はえ？」

その言葉を理解するのに十秒は要した。

「えっと・・・・・・・・シグナム」

「何だ？当麻」

「ones more again?」

「何故英語なのかは分からないが、子供が出来た。」

「誰の?」

「私と当麻の子供だ。」

そう言って、照れる赤いポニーテールの美女、シグナム

「——ッ、オオウ・・・」

かなりの眩暈がした。

なのは達は勿論、自分の世界の女たちも子供を求めるアプローチが激化するのには確実だろう・・・

神浄となってから誰も不幸にたく無いと言う思いの元、片っ端から立てたフラグを纏めて収穫して

組織内でも上位クラスのハーレムを形成している上条当麻

だが未だに子供は作っていないかった。

しかし、ヴォルケンリッターが人間と新生し、上条との子を生じた。

今、ここに均衡は崩された。

「シグナム、なのは達は仕方ないとしても俺たちの世界の奴ら、特に美琴や五和やインデックスには言うなよ」

嫉妬深い彼女らの事だ。自分も子供を作らせろ、と迫られるのは確
実だろう

しかし上条当麻に平凡など無いし、希望的な観測など無駄でしかない

「その、すまないが・・・」

「ま、まさ・・・か・・・」

「もう既に皆に自慢してしまっただ。」

次の瞬間、上条の携帯電話が鳴り始める。

そして、二人がいる部屋のドアが開く

そこには黒い笑みの魔王達が・・・

「「「「「当麻（当麻さん）少し、O・H・A・N・A・S・Iしよう
か？」「」「」「」

逃げられないと諦めたのか上条は力なく笑うしかなかった。

「は、はは・・・ふ、ふこ————ツツ！！？？」

お決まりの台詞すらも言う暇も無く、狂った女たちが肉食獣の如く
上条当麻に襲い掛かったのだった・・・

~~~~~皆で幸せ大家族END？~~~~~

「一人、二人、三人、四人！」

次々と殺戮を繰り返してゆくレイフォン、その相手は転生者である。

「どうでもいい、正義だ悪だと下らない御託を言つつもりは無い」

ISなどあったとしても、彼にとって大した障害に成りはしない

「理由は無い、死ね。」

余りにも無差別な殺戮発言である。

「殺すのに一々理由など必要ない」

何も考えずに在るがまま、無我の状態で行動する。

殺戮に心など不要、何も考えるな、ただ殺す。

それだけだ……

「復讐、下らない……そんな権利など誰にもない、死ね」

また一人、ISごと転生者の首を撥ねる。

「正当性など、どうでも良い……在るのは死ぬか生きるかだけだ。」

この世界は一夏達が生まれてから数年後の過去

この世界に於いて、レイフォンは転生者狩りを行っていた。

「居るんですよねえ・・・世界を乱す奴って・・・」

現在の時間は『白騎士事件』の時間だ。

日本海上空を転々と瞬間移動しながら、ISへ変化させた双子座の冥衣を纏って探索していた。

ISのハイパーセンサーに引っかからないように、空間干渉を行って空間断絶を起こしながらの搜索である。

「ISを倒せるのはISだけ・・・そうでも無いんだけどな・・・」

全身から気を放出し辺り一帯を満たす事で、己の空間へと変える。

その時、白騎士を纏った織斑千冬は何かを感じ取った。

「ん・・・？」

『どうしたの？ちーちゃん』

「空気が変わった・・・？」

千冬は武人たる己の本能が空間の変化を感じ取っていた。

『別に何も変わってないよ？』

（ 何だ？この感覚は、まるで何かに包まれているような・・・ ）

思考の海に入りそうな千冬の耳に親友の声が入ってくる。

『ちーちゃん、来るよ!』

「むっ、分かった。」

日本へと放たれたミサイル群を全て撃墜すべく織斑千冬は剣を振るった。

その様子を見ていたレイフォンは安心していた。

「良かった・・・事が起きる前に始末できて・・・」

右手には血が付着していた。

「さて・・・と、帰・・・えっ!?!」

そのまま帰ろうとしたレイフォンへ、何と大量のミサイルが迫って来るではありませんか!

「まさかの撃ち漏らし!?!」

即座に剄弾によって消し飛ばすレイフォン

「違う、これは・・・追加のミサイル!?!」

レーダーに反応有

「ッ!?不味い!?!」

即座にそちらの方へと向かうレイフォン

（ まさか・・・終わりを狙ってくるとは・・・ ）

確実に狙いは織斑千冬だろう・・・

「ああ！！もっ！！」

悪態をつきながらレイフォンは千冬の元へと向かった。

織斑千冬は苦戦を強いられていた。

ミサイルを全て撃墜したと思ったら、突如出現した謎のISに襲撃されたのだ。

余りにもおかしかった。

ISを作るのは親友の條ノ之束、ただ一人

ならば彼女が知らないこのISは何なのだろうか！？

「さっさと死にやがれえ！！」

ISの搭乗者の男の声が聞こえる。

「くっ・・・貴様は誰だ！？」

「教えるかよ！」

残り少ないシールドエネルギーを使い、相手のビームがを回避しつつ、間合いを一気に詰めるが

「甘いんだよ!!」

相手のバリアに阻まれ、傷一つ付けられなかった。

「死ね」

相手のビームソードが振り下ろされ、千冬の命は奪われ——無  
かった。

「なっ!?!」

そこに現れた黒き鎧をまとった純白の長髪の少年が相手の右手を切り落としていたからだ

「ギヤアアアア、痛い、痛いイイイ!?!」

悲鳴を上げて、絶叫する。

「貴様は、干渉しすぎた。故に消えろ」

冷酷に告げる少年、レイフォンが構えをとる。

「ぶざけんなあ!!俺はこの世界で好きに生きるんだ!」

「・・・下らない、御託は良い・・・消えろ」

空間が震えんばかりに『小宇宙』がレイフォンの中で燃え上がる。

「ハアアアアアアアアアアアツ!!!!」

「クソオツ！！死ねえええええ！！！」

自棄になった男がレイフォンへ突っ込んでくる。

しかし、レイフォンに通用はしない

両手を広げ、『小宇宙』を凝縮させ渦を作り出し、放つ

「マーベラス・ルーム！！！」

「ギャアアアアアアアアアア！！！！？？？？」

男はそのまま、レイフォンの放った渦に呑み込まれて原子レベルで分解され、消滅した。

「・・・ふう、終わった。・・・ガアッ！！？」

ビギッ！と体中に紫電が奔った。

「は、ははっ・・・この技を使うには体が不調すぎましたか・・・  
う・・・」

ぐらりと海面へ落ちそうになったレイフォンをガシリと支える千冬

「大丈夫か？」

「・・・ご迷惑をお掛けしてすみません。」

「いや、貴方のおかげで助かった。感謝します」

千冬にお礼を言われて、赤くなって照れるレイフォン

『ちーちゃん！もう軍が迫ってきているよー!!』

「何だと!？」

束の通信が入ってきたと同時に軍が捕獲しに来たのを確認した。

「不味いな、残りのエネルギーはもう殆ど無いぞ・・・」

絶体絶命かと思った千冬だが

「早く、捕まってください」

レイフォンが左手を差し出していた。

「何をするつもりだ？」

「いいから、急いでください」

仕方なく、レイフォンの左手をつかむ千冬

「・・・ハッ!!」

次の瞬間、二人の姿は消えていた。

一瞬にして東の目の前へとワープした二人

「うわぁっ!?!?」

すっごくビックリする東

「・・・何をしたんだ」

「何って・・・瞬間移動・・・です・・・が?」

物凄く顔色が悪いレイフォンが息も絶え絶えに答える。

「お、おい大丈夫か!?!?」

「ちょっと・・・キツイ・・・です・・・ね・・・」

そのまま気を失うレイフォン

纏っていた冥衣は勝手に外れ、オブジェ形態へと戻った。

「ん・・・?」

レイフォンが目覚めたのは家の一室であった。

「ここは・・・」

「気が付いたようだな」

千冬が部屋に入ってきた。

「ここは私の家だ。」

「はぁ・・・どうも」

レイフォンは起き上がると今へと向かった。

そこには東と幼い少年が居た。

「君は・・・？」

「おりむら・・・いちか・・・」

「僕はレイフォン・アルセイフ、よろしくね」

そう言っで一夏の頭を撫でると心地良さそうに目を細める一夏

「まぁ・・・ここまで干渉してしまいましたし、話をしておいた方がいいですね」

「あぁ、色々と気になる事が多いからな」

千冬、東、一夏の三人に話したのは

簡潔に言っつて、この世界は並行世界に於いて物語として有り

管理プログラムたるAIの神が転生者を始めたりした事

そして、自身が特殊な神的存在である事

そういつたことを話した。

「ふ〜ん、凄いなレイ君」

「ええ・・・まあ」

「あの鎧はなんなの？良くわからない物質で構成されていたけど・・・」

「あれは冥衣です。」

「冥衣？」

詳しく語るレイフォン

「冥衣はギリシャ神話の神、冥王ハーデスに仕える闘士が纏うものです。」

「神話の物なの？」

「ええ、素材はダークマターが主な材料ですが・・・神の世界の材質です。」

「ふ〜ん、成程ね」

興味深そうに聞く東にレイフォンはいろいろ語った。

「あのですね・・・東さん、貴方はあれだけの事を仕出かしたんですから殺されても文句は言えませんかよ？」

と、微妙に説教をしていた。

その後、この世界を去るべきか、悩んでいた所で転生者の介入を防ぐために残る事にした。

千冬の申し出もあつて織斑家に厄介になる事にしたのだつた。

数年間、忙しい千冬に替わつて、レイフォンは家事を一夏と一緒に  
行い、料理したり、剣術を教えたり、そして、生きてゆく上での道  
徳観の教育を施していた。

「レイ兄、僕、千冬姉えや篤や束さんを守れるように強くなる」

「そう・・・誰かも守る為に強くなるのは良い事だ。」

そう言つて、一夏に剣術を教える際にレイフォンは言った。

「僕が教えるのは技じゃないし剣道でも無い、戦つための剣だ。戦  
いの中で身に着けてゆく剣だ。」

そこからレイフォンは一夏に修行を課していった。

その内容はまず体を作り上げる。次にある程度、剣が振れるようになつたら彼の限界レベルの実力で打ち合う

そうして限界を超えて行かせて、戦いの中で己の剣を見つけさせた。

そしてレイフォンは一夏にこう言つ事があつた。

「もし、千冬さんと比べられても気にしないこと、君は君、千冬さ

んは千冬さん、目標とかにしてもいいけど恨んじゃいけない。だって君は織斑一夏だから、大したこと無いって言われても、口だけの奴の事は気にしないでね。」

「弱い者を虐める奴を倒すより、弱い者を助ける事」

このように一夏に教育を施してきた。

一夏が上条当麻の様な人間になりそうな気がするレイフォンだった。

十歳の時、一夏に対してレイフォンはこう言った事があった。

「一夏、もし君が僕の敵になるなら、全力でかかって来い、絶対的な力の差と絶望を教えてやる。」

深い闇を目に宿して語るレイフォンに一夏はこの時だけ恐怖を抱いた。

「形成、聖約・運命の神槍」

相変わらず、レイフォンは転生者をぶち殺していた。

今回は、ロンギヌスまで使って、ラインハルト化していた。

外見がラインハルトっぽく大人びて、腰まで伸びる金髪になるのだ。

何故、レイフォンが色々と出来るのかというと、世界樹との契約の

際に発動した完全模倣による効果と、ラインハルトとメルクリウスの魂の一部を貰ったからである。

総合戦闘能力では組織最強の覚醒状態のレイフォンに勝てる者など数える程しかない。

すると、またイレギュラーが・・・

「あの・・・」

「む・・・これは想定外だったか」

うんうんと一人現実逃避をしていると

「貴方は誰？」

「別段、名乗るほどの者では無い、単なる男だ」

「どうして、お兄さんはここに居るの？」

「卿に不貞を働かんとする輩に、眠りを与えるためだ。」

「お兄さん、人を殺したの？」

「ふむ・・・一度死んだ人間を人と呼ぶべきかね？」

「それって、ゾンビ？」

「卿がそう思うならばそうなのだろうな」

「私、怖いよ」

「案ずるな娘、私は負けん。卿にも将来、愛しき男が見つかるであらう」

「本当!？」

嬉しそうに眼を輝かせるシャルロットにレイフォンは語る。

「しかし、その道は前途多難だ。父に道具扱いされ、母はいなくなる。それ等に卿は耐えなければならん」

「うん・・・分かった・・・」

「卿の愛しく思える男の名を一夏と言う」

「イチカ?」

「その通りだ。さらばだ。シャルロット・デュノア」

そう言って、シャルロットから離れてゆくレイフォン

「イチカ・・・一夏・・・私の王子様・・・」

ポヤポヤ〜ンと嬉しそうに頬を染める幼きシャルロットがそこに居た。

一夏のフラグはレイフォンが建てた。

彼の女難は勝手に進んでゆくのだった。

時は変わってドイツ

Die Sonne toent  
Walter We  
ise In Brudersphaeren  
Wetterges  
ang. ) 日は古より変わらず星と競い )

Und ihre vorgeschriebene  
Reise  
Vollendet sie mit  
Donnergang. )  
( 定められた道を雷鳴の如く疾走する )

Und schnell und begeriflich  
schnell ) そして速く 何より速く )

In ewig schnellm  
Sphaerenlauf.  
( 永劫の円環を駆け抜けよう )

Da flammt ein blitzendes  
Verheren ) 光となって破壊しろ )

Dem Pfade vor des  
Donnerschlag  
s; ) その一撃で燃やしつくせ )

Da keiner dich ergruenden  
mag,  
Und alle deinen hohen  
Werke )  
( それは誰も知らず 届かぬ 至高の創造 )

Sind herrlich wie  
am ersten  
Tag

g . ( 我が渴望こそが原初の荘厳 )

Briah ( 創造 )

Eine Faust ouvert?re ( 美麗刹那・序曲 )  
「

レイフォンの体感時間が圧倒的なまでに延長され、相手を認識外の速度で叩き潰す。

「よし、終わり」

ドイツ軍の基地上空での戦闘である。

うん、目立ってるね。

しかし、レイフォンは黒いボロの外套を纏ったメルクリウス・スタイルなので誰にもわからない。

「・・・饑別に受け取ってくれたまえ、麗しき娘たちよ」

宙に浮かびながら、一人のIS部隊の隊員にMGSシリーズのソフトや特撮モノのDVDや萌えのゲームを送っておいた。

実は彼女が後のクラリッサである事をレイフォンは全く知らない

何となく、メルクリウスの口調みたいに話して、素性がばれない様にしてみた。

「ふっ、まためぐり合う運命ならば、再び会いまみえる事だろう・・・

さらばだ。」

塵気楼の様に消えてゆく、レイフォンをびっくりした様子で見ると、  
さんでした。

「……貴方には消えてもらいます。正確に言えば、その魂ごと  
死ね」

レイフォンは一人の神を殺しに来た。

「この儂を殺すと？」

「理由はどうでも良い、貴様の存在を消去する。」

「人間風情が儂を殺そうなど、笑止千万!!」

「そうですか……ハイドリヒ卿行きますよ？」

「（良からう、私の力を存分に使うが良い）」

レイフォンは神を殺す。

「Yetzirah（形成）」

彼の手に現れるは神殺しの槍、最強の聖遺物

「ロンギヌスランゼ・テストメント  
聖約・運命の神槍」

瞬間、圧倒的なまでの力が神を襲った。

「ば、馬鹿な!!!?あり得ん!人間が儼以上の力を有するなど!」

狼狽する神に死を与えるべくレイフオンは言葉を紡ぐ

「Dieser Mann wohnte in den Gruften, und niemand konnte ihm keine mehr, (その男は墓に住み あらゆる者も あらゆる鎖も)

nicht sogar mit einer Kette, binden. (あらゆる総てをもつてしても繋ぎ止めることが出来ない)

Er riss die Ketten auseinander und brach die Eisen auf seinen Füssen. (彼は縛鎖を千切り 枷を壊し 狂い泣き叫ぶ墓の主)

Niemand war stark genug, um ihn zu unterwerfen. (この世のありとあらゆるモノ総て 彼を抑える力を持たない)

Dann fragte ihn Jesus. Was ist Ihr Name? (ゆえ 神は問われた 貴様は何者か)

Es ist eine dumme Frage. Ich antworte. (愚問なり 無知蒙昧 知らぬならば答えよう)

)

Mein Name ist Legion (我が名はレギオン)

Briah (創造)

Gladshiemr Gullinkambi f?nfte Weltall (至高天 黄金冠す第五宇宙)

世界が塗り替えられ、死の闘技場へと変貌する。

「愚者には死の祝福を」

ラインハルトモードのレイフォンが振るった全力の槍の一撃は破壊の嵐を生み出し  
神の魂ごと全てを破壊しつくした。

「ふむ、いかんせん手加減の程を誤ったか・・・」

破壊の嵐は神のみならず、世界そのものを破壊し食らい尽くした。

ありとあらゆる魂が力の糧として取り込まれ、力を増してゆく。

その数、すでに兆の桁である。

「どつやら、すでに葉の一部を引き千切ってしまったか・・・今度からは抑えねばならん」

転生しようとしていた魂は全て例外なく砕かれ、消滅していた。



千冬は了承した。

「ありがとう、千冬さん・・・それと愛してますよ」

「――私もだ。」

レイフォンと千冬はこの世界に於いて恋人となった。

その直後

「ちーちゃん、レイ君、おめでと〜〜!!!」

束がやってきて祝福してきたので

「お前はいつから居た？」

冷静にギリギリとアイアンクローを束にかます千冬

「痛たたたたっ!!!ちよ!ちーちゃん!愛が!愛が痛い!!!」

「誰が愛だ!!!」

結局、一通り千冬折檻した後、祝福して束は帰って行った。

「さて・・・まあ、その、今夜は・・・寝かせませんよ？」

「望むところだ。」

レイフォンと千冬は激しい一夜を過ごしたのであった。

千冬が受けたレイフォンの力とは、聖槍での契約だった。

ただし、戦奴としての契約では無く、対等な立場で運命を共にする契約であった。

これから少ししてこの物語は大きく始まる。

上条当麻は不殺主義であり、お人好しである。

彼の考えに対立する奴も組織内には居る。

ルルーシュなどの悪の道を進んだ者たちである。

彼らからして見れば、上条の言っていることは理想論であり、綺麗事に過ぎないと社会の闇や人間の醜さを知っているが故に切り捨てる。

だが、しかし上条はそれでも決して死んでもいい命など無いと言っただから彼は試練を与えた。

ある世界に置いて上条は今まであった事のない程の下種で外道で救いようの無い奴と戦い、殺さなかった。

しかしソイツは逃げ出し、復讐に来た。笑いながら上条と関わった人間を殺して、回ったのだ。

「ギャハハハハハハ、どうだ！素敵だろ！」



これを使えば人類は争いが無くなるが、これは押しつけである為、  
上条は使おうとはしない。

これが彼等の日常である。

世界樹から選ばれた者達の仕事である。

**自分のノートに書いている最大級の厨二小説（後書き）**

これが一番最初に書き始めた小説かつ、終わりのない厨二小説です。

レイフオンは何でも真似できます。恋に積極的になってます。

上条さんは四回変身します。

インフィニット・アクエリアス(前書き)

今回はISと聖闘士星矢LCのクロスです。

## インフィニット・アクエリアス

「…お辛かったですでしょう…。貴方は、ご自分の死で迷い堕ちていく弟を、ずっと一人で見つめ続けていた…。セラフィナ様、これからは私も共に見守りましょう。ブルーグランドを。彼の行く末を…。」

黄金聖闘士、水瓶座のデジエルはブルーグランドにて、自らが慕う女性セラフィナと共に氷の棺に眠る事になった。

「また、この夢か…。」

IS学園の図書館で居眠りをしてしまったらしい。

外を見れば既に夕暮れである。

そこに一人の女性がやって来た。

「またここに居たのか…。」

「織斑先生。」

やって来たのは彼の担任である織斑千冬だった。

「そろそろ閉館時間だ。部屋に戻れ、セイント」

「分かりました。」

返事をして彼、デジェル・セイントは本を元の場所に戻し、彼女と共に廊下を歩く。

「貴方には感謝してもし切れない・・・織斑先生」

「感謝するのは此方だ。お前が居てくれたお蔭で、随分と救われた。アイツも・・・私もな。」

八年前、デジェルはこの世界にやって来た。

織斑家の前で倒れており、千冬に拾われて織斑家に居候していた。

水瓶座の聖衣が勝手に外れてオブジェ形態に戻った後、彼の体は光に包まれて幼くなった。

目覚めた彼は事態に愕然として、千冬に事情を説明した。

悩んでいても仕方が無いと冷静に判断したデジェルは織斑家に居候しながら、この世界について調べ、一夏の兄代わりとして暮らしていた。

戸籍は束に頼み、何とかしてもらった。

束が黄金聖衣の材質を聞き調べてみて大興奮していた。

千冬と一夏にとって、彼は少し幼いが頼りになる男だった。

ちなみに現在の年齢は20歳である。

「また明日、織斑先生」

「ああ、セイント」

彼は自分の部屋に戻ると、弟分の織斑一夏が迎えてくれた。

「お帰り、デジエル兄」

「ただいま、一夏」

デジエルはベッドに座り、一夏に聞く。

「そう言えば、明日はクラス対抗戦だな。」

「ああ、鈴が何で怒ってんのか分かんないけど、やれるだけの事はやるぞ。」

「そうか・・・頑張れよ。」

「ああ!」

デジエルは一夏の鈍感さに呆れつつ、応援する。

そして、迎えたクラス対抗戦当日

一夏と鈴の戦いに乱入者が現れた。

デジエルは即座に行動を開始した。

「織斑先生」

「任せられるか？」

「ええ・・・」

「そうか・・・あいつ等を頼む。」

「分かりました。」

デジエルはアリーナの外へと向かおうとする。

「デジエルさん、待って下さい！私も参りますわー!!」

セシリアも行くこととするが彼は止める。

「セシリア、君は待っていてくれ。」

「でも!？」

「大丈夫だ。二人は絶対に助ける。ここは私を信じてくれ」

「・・・分かりましたわ。デジエルさん、御気を付けて」

「ああ、行つて来る。」

彼は自分の胸にあるオブジェ型のペンダントに念じる。

「展開、『水瓶座』<sup>アクエリアス</sup>！！」

水瓶座の黄金聖衣を纏ったデジエルが現れる。

一旦、外へと出ると上空へと飛び上がりアリーナへと向かう。

この外見からどうやって飛んでいるのかも不明であるが、確かにデジエルは空を飛んでいた。

そして彼の武器は基本的に使用禁止であり、素手での戦いを強いられる。

何故なら……

「これを人に対して使う訳にはいかないが、それ以外ならば！」

両腕を組み、頭上へと掲げる。

そして己の『小宇宙』を燃え上がらせる。

「『オーロラ・エクスキュージョン』！！」

振り下ろされた両腕から放たれた絶対零度に近い凍気は、アリーナのシールドをいとも容易く破壊した。

「この『小宇宙』は……デジエル兄！！」

「待たせたな、一夏、鈴。後は私に任せろ」

「でも、デジエルさん一人でなんて・・・」

「大丈夫だ！デジエル兄は負けない」

鈴が不安そうな声を上げるが、一夏は絶対の信頼を置いている兄が負ける筈が無いと信じている。

「『小宇宙』を感じない。と言う事は無人機か・・・ならば手加減はしない」

謎のISから放たれるビームを光速移動で回避して行くデジエル

「その腕、潰させて貰う。『ダイヤモンド・ダスト』！！」

彼の右手から放たれた凍気が敵の腕部を凍てつかせる。

凍気によって大気中の空気の温度が急激に下がり、キラキラと戦場が輝く

「綺麗・・・」

「あれがデジエル兄の実力か・・・」

眼にも留まらぬ速度で敵を翻弄し、凍気によって両腕を凍てつかせて砕く。

その圧倒的かつ美しく戦う強さに一夏は憧れる。

管制室でも色々と騒いでいた。

「綺麗ですね・・・」

「一体あれは・・・？」

「セイントが放った凍気によって空気中の水分が凍り付いて起きる現象だ。」

千冬が説明する。

「じゃあ、あの凍気って一体何度なんですか!？」

「最低 - 80 位まで出せるそうだ。」

その言葉に真耶が驚きの声を上げる。

「そ、そんなモノを人間に使ったら・・・」

「ああ、絶対防御が無くなった途端に氷漬けになる。」

「だから、デジエルさんは今まで素手で戦っていたのか・・・」

筈は過去の事を納得する。

「おまけにアイツは出せる最低温度は - 273 出せるそうだ。」

「それって絶対零度じゃないですか!?!」

「いや、アイツは僅かに届かないと言っていた。」

「でも、充分というか凄まじすぎますよ!?!?」

とんでもないスペックに真耶は驚きすぎている。

すると画面上のデジエルが両腕を組んで頭上に構えている。

「見て見る、アイツが必殺技を放つぞ。」

「夏はデジエルの『小宇宙』が高まってゆく事に気が付いた。」

「デジエル兄、必殺技を放つ気だ!」

「え、それって・・・」

「夏は鈴を抱き、その場から距離をとる。」

「ちょっと!?!?」

「いいから!」

ちらりとデジエルは夏達に眼をやってから、両腕を振り下ろした。

「『オーロラ・エクスキューション』!?!」

両腕から放たれた凍気が完全に敵を凍てつかせ、敵はコア以外を残

して砕け散った。

周囲がキラキラと輝くが、それは敵の凍てつき砕け散った破片が日光を反射しているからだ。

その様子は美しくもあり、恐ろしいモノでもあった。

「凄え……」

「……」

純粹に憧れのまなざしを送る一夏と違い、鈴は人間に放たれたら、あの様に砕け散って輝くのだろうか？と考えてしまった。

しかし、即座にその考えを否定する鈴

“デジエルさんが、そんな事をする筈が無い”

そう信じて、鈴は一夏と共にデジエルの元へと急ぐのだった……

時は流れ、臨海学校にて

白い砂浜で千冬に付き合っているデジエルがいた。

「サンオイルを塗るのは山田先生に任せた方が良いのでは？」

「いや、お前で構わん。早くしてくれ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

むう・・・と唸り、脳内で素数を数えながらオイルを塗ってゆくデジエル

「んっ・・・・・・・・あっ・・・」

「・・・ッ!」

千冬が妙に妖艶な声を上げるものだから、久しぶりに湧き上がってくる劣情を抑えるのに苦労するデジエル。

「ハロ~~~~久しぶりだね!!じえるくん!」

「久しぶりですね。東さん」

そして東との再会

「この世界でも戦いは起きるか・・・」

女尊男卑の世界でデジエルは何を思い戦うのか?

インフィニット・アクエリアス、始まる・・・・・・・・か?

インフィニット・アクエリアス（後書き）

挿入歌は『地球ぎ』

OPは『The Realm of Athena』です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1235y/>

---

思いついたネタの集まり

2011年11月8日02時07分発行